

近世日光をめぐる歴史意識

——『日光山志』・『日光巡拝図誌』を中心として——

岩 橋 清 美

要 旨

本論文は、一九世紀初頭における日光をめぐる歴史意識について、植田孟縉の『日光山志』と竹村立義の『日光巡拝図誌』をもとに論じるものである。『日光山志』は五巻五冊からなり、天保七年（一八三六）に刊行されたもので、日光に関する最もまとまった内容を持つ地誌である。その内容は中世以来の山岳霊場としての歴史から書きはじめられ、山内の景観・建物の構造・奥日光の動植物・日光周辺地域の人々の暮らしにまで及ぶ。孟縉は、東照宮だけではなく周辺地域を含めて「日光」であることを示し、江戸幕府の権威の象徴として描いている。こうした、彼の歴史意識は、八王子千人同心という身分集団に属していたことに規定されていると言える。

これに対し竹村立義は、東照宮というこれまで秘匿されてきたものを、豊富な挿絵で視覚化し、自らの考証を加えて『日光巡拝図誌』を編纂した。特に注目されるのは、武家であっても容易に入ることができない奥院御廟の様子や東遊・延年之舞といった儀式を描いた挿絵である。『日光山志』が日光山全体を詳細に記述しているのに対し、『日光巡拝図誌』は参詣者の興味関心を中心にとめられた書物と言えよう。

両者の日光へのアプローチは非常に対照的ではあるが、二つの地誌に共通することは、日光に関するまとまった情報を読者に提供し、東照宮をより民衆に開かれた存在にしたことである。その背景には参詣者の増加や東照宮信仰の広がりがある。こうした東照宮をめぐる社会の変化が東照宮の書物化を可能にし、多くの読者を生み出したと言えよう。二つの地誌は、まさに一九世紀初頭の読者を意識したものであり、これらを通して日光の歴史化が図られたのである。

はじめに

本論文は、近世後期の日光をめぐる歴史意識について、植田孟縉の『日光山志』と竹村立義の『日光巡拝図誌』をもとに論じるものである。

日光東照宮は徳川幕府初代將軍徳川家康を祀る神社であり、元和三年（一六一七）の創建以来、武家政治の理想を体现する存在として武士層の崇敬を得てきた。一八世紀半ば以降は、東照宮信仰の拡大と相俟って民衆にも広く信仰された。⁽¹⁾ とくに民衆の日光参詣の隆盛は、参詣者の宿泊をめぐる争いの増加や参詣者向きの案内記の刊行からもうかがえる。⁽²⁾

地誌と歴史意識の関係を論じた研究は、近年、編纂者の意図の分析から書物の受容・伝播といった読書論・読者論へと変化しつつある。前者については白井哲哉氏の江戸幕府・諸藩の地誌編纂史研究がある。⁽³⁾ 後者については、書物がどのように社会に受容されたのかという視点にたち、読書と歴史叙述の関係を論じた研究がある。⁽⁴⁾ 筆者も地誌の引用文献の分析から編纂者が先行する書物をどのように解釈し地誌に反映したのかを実証し、考証学的手法を用いながらも地域のアイデンティティを論理的に正当化していたことを論じた。⁽⁵⁾ すでに、指摘されているように一八世紀半ば以降、多種多様な蔵書を大量に持つ者が出現し、読者層も広がっていった。⁽⁶⁾ 出版流通の拡大と読書の広がりは、社会に一定程度の「社会的通念」を形成させることになったが、その一例が「名君」像の形成である。⁽⁷⁾ こうした研究を踏まえ、本稿では徳川家康の象徴である日光が書物を通じて情報化されたことの意義を考える。

日光については、徳川家康に関わることであったため、秘事とされ、出版物にはなりえないものであった。しかし、

民衆の日光参詣が盛んになり、東照宮信仰が各地に広がると、地域の知識人層にとって東照宮は秘匿されるものから学問の対象あるいは、一度見てみたいという興味の対象になっていった。本稿の分析対象である『日光山志』・『日光巡拝図誌』の編纂もこうした民衆世界の反映であると考えられる。

ここで、日光東照宮の概要を述べておきたい。現在、日光では東照宮・二荒山神社・輪王寺を合わせて日光二社一寺と称しているが、明治四年（一八七二）の神仏分離以前は日光山と総称されていた。日光山の歴史は古く、奈良時代末期に勝道上人が二荒山・四本龍寺・中禅寺を創建したことに始まる。鎌倉期には関東武士の信仰を得て発展するが、豊臣秀吉に寺領を没収されてからは衰退しつづつあった。しかし、元和三年（一六一七）、徳川家康の遺骸が久能山から当地に改葬されると、日光は徳川政権の聖地として位置づけられた。正保二年（一六四五）には朝廷から東照宮の宮号が宣下され、翌年からは日光例幣使が派遣されるようになった。社殿の創建は徳川秀忠が行ったが、その後、徳川家光が寛永十一年（一六三四）から一年三か月の歳月をかけて大規模な造営を行い、現在の形が出来上がったといわれる。江戸幕府は造営にあたり、中世以来、山岳信仰の中心であった坊堂を移動させ、その場所に東照宮を創建することで、空間的にも東照宮が日光の中心であることを印象づけた。また、建造物には平和と善政のシンボルとして龍や獬等の霊獣の彫刻が施され、陽明門前には東アジアにおける徳川権威を示すべく朝鮮鐘や琉球灯籠等が置かれた。⁽⁸⁾

東照大権現の神号決定から寛永の大造営に至る一連の動向は、南光坊天海の主導によって進められた。彼は中世比叡山で生まれた山王神道を基盤に山王一実神道を創始して徳川政権の永続を論理化した。⁽⁹⁾

近世において、日光に関する本格的な地誌は『日光山志』が刊行されるまで存在しなかったと言える。これは江戸幕府が東照宮に関する出版物を禁じていたことや、東照宮に関わることは秘事であり、その記録化が制限されていた

ことによる。しかし、その一方で社参を経験した幕臣等によって多くの記録が作成されていた。しかし、これらの多くは、日光に関する和歌や漢詩を詠み込んだ紀行文で、地誌とはいえない。

一方、近世の日光山は、中世以来の山岳信仰の霊場としての性格も持ち続けたことから、將軍・公家・大名の社参だけではなく、庶民の参詣も多かった。日光では参詣者は「堂者」と称され、一般的には山内の特定の坊の旦那になっていた。百姓・町人は案内人に先導され、麻上下着用の上、鰐口下まで進み賽銭・初穂料を奉納した。こうした参詣者のために門前町では簡易な案内書を刊行した。管見の限りでは、享保十三年（一七二七）に御幸町町人鷹橋義武（治郎左衛門）が執筆・板行した『日光山名跡誌』が最も古い。本書には山内の堂社の説明を中心に、日光の名物や各方面からの里程が記されている。堂社については、成立年代・由来・建物の特徴を簡略にまとめた上で、位置関係を示す挿絵が添えられている。同書は好評を博し、その後、明和元年（一七六四）・文政五年（一八二二）には石屋町の遠藤喜六、天保十一年（一八四〇）には同町の大島久兵衛から再版された。再版時には、日光八勝・日光奉行配下の役人構成・山内の番所の位置等の情報が付け加えられた。また参詣者への便宜を図るため、『日光山名跡志』の内容をより簡略化した『日光山道しるべ』（明和元・文政五年）、『日光山諸所案内手引草』（寛政二・文政五・天保十一年）が板行された。これらの書物は日光社参時に刊行されたもので、本格的な地誌というべき内容を備えてはいない。その意味で、竹村立義の『日光巡拝図誌』は紀行文でありながら、挿絵が多く史跡や名所の考証が詳細で、全体として名所図会的な要素が強い。よって本稿では、この二つを分析対象とした。

一 『日光山志』に見る日光

『日光山志』（以下では『山志』と略す）五巻五冊からなり、天保七年（一八三六）に幕府の出版許可を得て、翌八年（一八三七）に刊行された。書肆は和泉屋庄太郎他九軒でいずれも江戸である。

序文は若桜藩藩主松平冠山・幕府右筆屋代弘賢が記しており、前者が漢文、後者が和文である。冠山は幕府の地誌編纂事業において『編脩地誌備用典籍解題』を執筆した人物であり、植田孟縉も『新編武蔵風土記稿』の調査に関わっていたことから、地誌調所頭取間宮士信を通して依頼したと推測される。冠山の序文が文政八年（一八二五）であることから、『山志』は、この頃には完成していたと思われるが、天保三年（一八三二）、和泉屋庄太郎が町奉行所に売り広めの許可を申請した際、社家側から内容に誤りがあるとの指摘を受け、これを訂正したため、刊行が天保八年（一八三七）になったといわれる。⁽¹⁰⁾

著者である植田孟縉について述べておきたい。彼は通称を十兵衛、諱を孟縉と称し、宝暦七年（一七五七）、吉田藩の江戸藩邸で藩医熊本自庵の子として生まれた。その後は八王子千人同心組頭植田家の養子になり、安永四年（一七七五）に家督を相続した。養父元政の父魯石も医者だったことから養子縁組がなされと考えられる。文化九年（一一二）に、八王子千人同心が『新編武蔵風土記稿』の編纂に参画することになると、千人頭原胤敦等とともに多摩・秩父・高麗三郡の調査を担当した。⁽¹¹⁾

孟縉は生涯に日光勤番を一四回務めたと伝えられており、その回数は他の同心と比べて突出していた。晩年には、勤務出精が認められて普請役元締格に任命されている。著作には、『日光山志』のほかに『武蔵名勝図会』（文政三年）・

『鎌倉攬勝考』（文政一二年）等がある。このうち『武蔵名勝図会』は地誌調査の副産物である。

（一）内容構成と引用書目

最初に『山志』の内容構成と主な引用書目について表1をもとに述べておきたい。

巻一では、冒頭に「日光古図」・「御山内総図」を配置して全体の景観を示し、続いて下野国の名称の由来、日光神領の町村、神橋・本宮権現・歴代日光座主の名前が記されている。ここで興味深いのは、孟縉が日光の歴史を中世まで遡り、勝道上人の逸話を取り上げている点である。第二巻は新宮権現（現二荒山神社）・瀧尾権現等を中心に構成されている。第三巻・第四巻では日光の自然や動植物、民衆の暮らしに目が向けられており、日光八景、華嚴滝、男体山といった景勝地、岩燕・慈悲霊鳥・白根葵・石楠花等の動植物、足尾銅山で働く民衆の姿が描かれている。巻五は『山志』の中心となる部分で、東照宮の建造物、延年之舞、東遊等の儀式について記されている。

『山志』の特色の一つに多くの絵師が挿絵を手がけていることがあげられる。既に指摘されているところではあるが、絵師には谷文晁の系列が多く、渡辺崋山・高久靄崖・椿椿山・椿恒吉・依田竹谷・喜多武清・大西椿牛・中山青崖・岡田閑林・松本交山⁽¹²⁾がいる。このほか葛飾北斎・二世柳川重信等がいる。しかし、『山志』には、こうした著名な絵師だけではなく、八王子千人同心河西愛貴や地誌調所頭取間宮士信の挿絵もある。河西は風景画が得意で、『新編武蔵風土記稿』編纂においても挿絵を担当している。

孟縉は挿絵と文章の関係について「およそ文字は画によりて真を顕し、画は文字によりて真を給ふ、もし画ありて字なきはその事明らかならず、字ありて画なきはその真観ることなし⁽¹³⁾」と述べており、挿絵と文字が補完関係にある

表1 『日光山志』の概要と引用書目

巻数	主な内容	引用書目
1	日光山総説・御山内略図・御山内縮図・日光御領・町入口図・松原町・石屋町・御幸町・竜蔵寺・神主山・稲荷町・下鉢石町・中鉢石町・上鉢石町・鉢石炊烟図・観音寺・下馬・星宮・勝道上人蛇橋を渡り給ふ図・神橋・大谷川・御番所・本宮権現・四本竜寺・深砂王社・当山御座主御歴代・強飯・御本坊・三仏堂	先代旧事本紀・続日本紀・新撰姓氏録・延喜式・廻国雜記・和名類聚抄・吾妻鏡・建立修行記・枕草子春曙抄・万葉集・懷中・鎌倉大草紙・結城戰場物語・鎌倉年中行事・新古今和歌集
2	新宮権現・田村丸參詣図・延年舞・開山堂・勝道上人墓・産宮・手掛石・飯盛杉・滝尾瀑布・滝尾社図・影向石・滝尾靈神影向図・鐘樓・二王樓門・拜殿・中門・本社・礼拝石・千手堂・本地堂・根本堂・三十番神堂・慈恵大師堂・常行堂・御靈廟・慈眼大師廟・文珠堂・求聞持堂・阿弥陀堂・御座主御廟	続日本後紀・文徳天皇実録・日本三代実録・神社考・元亨釈書・廻国雜記・日光山滝尾靈託記・吾妻鏡
3	御山内寺院坊社・学頭・修学院表門図・衆徒二十箇院・別当四箇院・八十坊舎・御奉行屋敷・火之番屋敷・清竜推現・兄弟契・淨光寺・慈雲寺・鳴虫山・鳴虫紅葉図・素麵瀧図・日光八景・殉死墓碑・諸家墓碑・如宝山蔓延松・二子山・不動岩・興雲律院・久次良村・寂光念仏堂・求聞持堂跡・寂光寺・清滝権現・清滝寺・清滝観音堂・足尾道・馬返村・前二荒山・般若滝	八雲御抄・藻塩草・後撰和歌集・六帖・御神領村名寄
4	華厳滝・岩燕図・男体山禪頂小屋・什物古馨・中禅寺別所・中禅寺古棟札・走大黒影像・中禅寺境地并びに湖水図・三社権現本社・拜殿・本地観音堂・唐金鳥居・武射祭・慈悲心鳥図・勝道上人三神影向を拝したまふ図・如宝山図・石楠花図・瑠璃壺・竜頭瀧・中禅寺温泉・前白根山・奥白根山・白根葵図・深谷岩茸取図・足尾郷・銅山濫觴・山中銅掘図・日光諸所名産	廻国雜記・性靈集・中禅寺私記・万葉集・続古今和歌集・新後拾遺和歌集・堀川百首・夫和歌抄・新古今和歌集・新千載和歌集・六帖・鎌倉大草紙・和名類聚抄
5	御鎮座記・御宮略図・石御鳥居・巨石御燈炉・五層宝塔・御番所・二王御門・三神庫・白象図・御番所・御手洗水盤・唐銅御鳥居・輪藏・諸家兼備御燈炉・朝鮮国献備洪鐘図・日光山鐘銘・朝鮮国献備燈台穗屋図・阿蘭陀献備燈台図・琉球献備燈台図・陽明御門・御天井竜二竜図・御唐門・唐銅御燈炉・御拜殿・御本殿・御廻廊・坂下御門・御門主御登社御門・相輪橋・御神号御位階・御遷座・御宮号・例幣使・將軍家御參詣之次第・東遊・御神事毎歲御執行次第・奉幣使式・御宮成神事・延年舞・渡御還御音楽・御神事御行列次第・田楽法師図	御遷座之記・羅山集・法華八講記・続拾遺和歌集

ことを重視していた。

『山志』は編纂にあたり多くの書物を使ったと考えられるが、本文中にはそれらの引用書目がほとんどで明記されていない。例えば巻一で引用されている文献は、そのほとんどが勝道上人を中心とする中世の歴史を記した部分で用いられている。なお、勝道上人について、本来は『性霊集』・『元亨釈書』・『高僧伝』を使用すべきであるが、それぞれの内容に異が多いため、これらを引用しなかったとある。孟縉は考証の基本資料として『日光山縁起』・『日光列祖伝』・『滝尾建立伝記』・『千部会日記』・『往古行事集』・『三月会縁起』をあげてはいるが、これらは家職の秘記であるため、山内の衆中でも見るできないものであった。このうち『千部会日記』は竹村立義も書名をあげている。日光関係の文献は、知識人の間ではかなり共有化されていたと考えられるが、山内の儀式が秘儀であったため、関連文献の披見は困難であった。『山志』に引用文献が少ないのは、こうした情報の秘匿によるものである。

(二) 植田孟縉の歴史意識

a 実地調査による日光の再現

『山志』の特色の一つに、山内の建物に関する記述が詳細であることがあげられる。これについて、孟縉自身は参詣者の便に供するためと述べている。一例として陽明門から奥院にいたる部分を見ていこう。陽明門は、その装飾の美しさから一日中見ても飽きないという意味で「日暮門」とも称され、民衆はこの門の外から東照宮を拝した。武家も佩刀を脱し、差し添えのみで中に入ったという。『山志』では陽明門・御唐門・御瑞籬・御拝殿・御石の間・御本殿・御回廊・坂下御門の項目を置き、その内容は、孟縉が実際に見たままを詳細に記したものである。

拝殿の記述を見てみると、内部の構造について「御浜椽並びに高欄とも黒臘色にて、御内の御柱向きは摠金だみ、外なる御長押うへは素木、鳳凰の高彫り、金彩色」、「御唐戸、黒臘色、金の唐草蒔絵、正面の御本間、御天井折揚げ二重の格天井、その内へ岩、紺青にて丸竜の彩色、その形皆異なり」といった表現が続き、意匠が細かく記されている。⁽¹⁵⁾ また内部を飾る絵画についても「東西の御襖戸東は金泥地にして竹に麒麟の彩色、西の方は獅子の絵なり。探幽の筆なりといふ」とあるように、読者が具体的にイメージできるように配慮した記述がなされている。⁽¹⁶⁾ こうした記述の背景には、考証を加えること対する幕府の制限や披見できる文献が少なかつたためと考えられる。しかし、詳細な建物の描写は、これまで秘匿されていた日光を可視化し、情報化したとも言えるのである。



図1 岩沢瀉・梅桜の図

（『日光山志』巻四、国文学研究資料館所蔵）

b 日光の自然と地域の暮らし

『山志』の内容は、巻三の後半から巻四にかけて奥日光へと移り、中禅寺湖や男体山の景観や自然、足尾銅山で働く人々の暮らしにも及んでいる。姫石楠木・岩沢瀉・梅桜・岩鏡・岩蓬・苦桃・石楠花・肉蓯蓉・白根葵等が絵入りで紹介され、花の開花時期や茎や葉の様子、食用の可否等の情報が挿絵のなかに書き込まれている。

さらに、日光の名産品が飛禽・魚虫・薬品・走獣・飲食類・細工物に分類して書き上げられている。孟縉は、こうした情報を山内で薬草を採取している村人から得ていたようだが、一八世紀半ば以降の本草学の影響も看取できる。引用はされていないが、記述には、小野蘭山『日光採品録』、喜多村直『日光採品図説』との共通点が見られる。

足尾銅山については近世初頭からの濫觴が書かれ、銅穴のなかで採掘する人々の姿や銅と石とを分別する作業をする女性の姿を紹介している。挿絵には、女性たちが太布で拵えた「猿子袴」という作業着を身につけて作業を行う様子や、その傍らでは老人が子守をしている姿が描かれ、地域の暮らしの実態を伝えている。



図2 足尾銅山で働く女性の姿
(『日光山志』巻之四、国文学研究資料館所蔵)

c 八王子千人同心の歴史意識

『山志』は刊行に至る経緯で幕府の指示により、内容の訂正が行われていた。先行研究によれば、刊行された『日

また、景勝地の一つである男体山については、この山がかつて「黒上山」（黒髪山）と称されていたことに注目し、『万葉集』・『続古今和歌集』・『新後拾遺和歌集』・『堀川百首』・『夫木和歌抄』から「黒髪山」を詠んだ和歌を書き上げている。⁽¹⁶⁾ さらに孟縉は「黒髪山」にまつわる村人の話を続けている。これによれば、上野国の別称である「毛の国」の「毛」は「黒髪山」にも通じ、転じて男体山が樹木が生い茂る豊かな山であることを示すという。足尾地域を古歌に詠まれる名所であり、産業が発展した地として位置づけている。巻四は他巻と比較して文献による考証が多く見られ、地域社会の描き方に孟縉の個性が反映されていると言える。足尾地域が日光の中心部から離れているため、記述に制限を加える必要がなかったことが大きいと考えられる。しかし、周辺地域を組み込むことで、逆に日光全体を「徳川の平和」の象徴として表現することを可能にしているのである。

『光山志』のほかに『光嶺秘鑑』（四冊）・幕府献上本『日光山志』（一〇巻）があり、とくに前者は草稿本ではあるが、典故を明記した細かい考証が加えられていたという。⁽¹⁷⁾この草稿本をもとに献上本がつくられたが、孟縉自身の考証の多くが削除され、山内の状況を詳細に記すにとどまった。⁽¹⁸⁾この訂正は本人の意思ではなく、数人の校訂者によるものであった。儀式に関する部分に秘匿すべき内容が多かったためと推測される。では、孟縉は、なぜ、内容を訂正してまでも『山志』を刊行することに拘ったのだろうか。この点について、幕府献上本の孟縉の序文から考えてみたい。⁽¹⁹⁾

下野国二荒の御山は、わが東照大御神の鎮り御座ましましてより、莊嚴新たにして輪奐美をつくせり、我が家そが防火の事を世々の職として、安永の初より長官に属し、この年までにおよそ十あまり三たび四たびも役におもむき官舎に年をこへ、或はとし半もかの地に宿りて、あしたゆふ日々に一度御宮をはじめ、其余の所々を巡りて警衛し、又は暇ある時ハ佳境を遊観して至らぬ限なければ、やたての硯もておろ／＼かひつけぬ、入峰禪頂すべきあたりは、崔嵬たる高山にして尋常の人のえ行べき境にあらざれば、しるべうもあらねど、土人等採葉をわざとせるものまれにハ人跡の絶たるを陟り、岩間に雨露をしのぎ日数へて帰りくるとなん、かゝるたぐひハ土人の世すがとすればにや、神もゆるさせ給ふべし、彼の採葉のついでにあつらへて、いたらぬ高山の奇勝を搜り得たるもあり、行法の秘密、宝庫の古書のごときは僧徒について索め得るもあなれど、其要をつくすことを得ず、たゞ大概をとれるのみ、こたび幕府の御参あるべき仰せことありと聞けるものから、かのそうしをとりて十の巻のふみにかいつづりぬ、供奉の人々此ふみを見て、御山のあらましをもしりなば、大君の仰せごとにおひていさゝかのたすけともなりなんと、こひねがふることしかり

序文によれば、孟縉は安永頃より千人頭に從つて十三、四回の日光警衛を勤め、その勤めの最中、あるいは余暇を利用して東照宮および日光周辺を探索したとある。『山志』を刊行するに至った直接の契機は、日光社参の挙行であり、

東照宮の御威光を広く宣伝するためであった。社参に供奉する武士層を読者として想定していたと考えられる。

日光の地誌をまとめ、幕府に献上しようとした彼の行動の背景にはどのような意識があるのだろうか。この点を考える上で重要になるのが八王子千人同心としての意識である。八王子千人同心とは、戦国大名武田氏の小人頭に由来すると言われ、その編成は頭・組頭・平同心からなる。千人同心の身分は、近世前期より株によって売買されていたため、経済的發展を遂げた百姓が家格の上昇や更なる経営の拡大を目的に千人同心になることが多かった。このため、近世初頭から八王子千人同心を務める旧家層と株取得によって千人同心になった新興層の間には、勤務等をめぐって対立することが少なくなかった。また、千人同心全体においても「御家人」として幕府から認められたいという願望があり、こうした状況と相まって一九世紀初頭には集団の内外に矛盾を抱えていた。⁽²⁰⁾

八王子千人同心の徳川忠臣としての意識は、彼らが東照宮を祀り信仰していることや、東照宮との関係を強調する由緒を形成していることから明らかである。孟縉が『山志』中に「火之番屋敷」を立項し、慶安五年（一六五二）から八王子千人同心の日光火の番が始まった経緯、勤務の体制、寛政初年の鉢石屋敷の廃止について細かく記していることも、その証左であろう。孟縉は、渡辺華山や松平冠山等と親交があり、『山志』以外にも多くの地誌の編纂を手がけた在村知識人である。その意味で『山志』の編纂には、自身の学問の集大成という意味もあった。しかし、記述の細部には、八王子千人同心旧家層の歴史意識＝徳川氏忠臣意識が濃く反映されている。

そして、孟縉の歴史意識は出版を通して「日光の歴史」として多くの読者に読まれることになったのである。書物を通じて日光の歴史化・情報化には、それまで儀礼を通じて徳川権威の象徴として機能していた日光の記号化とも言える現象が看取できるのである。

二 『日光巡拝図誌』に見る日光

次に、『日光巡拝図誌』（以下『図誌』と略す。）をもとに竹村立義が日光をどのように見ていたのかを考えてみたい。竹村立義は独笑庵・湖橋とも称した新橋の仕立屋で、仕事の合間に江戸近郊を旅行するのが趣味であった。彼は、旅行のたびに紀行文をまとめているが、管見の限りでは、『図誌』のほかに、『川越松山遊覧図誌』（文化一五年）・『秩父巡拝図絵』（文政六年）・『鹿島参詣図会』（文政七年）・『杉田図会』（文政八年）・『小野六所両社乃記』（文政一〇年）・『百草紀行』（文政一〇年）・『御嶽山一石山紀行』（文政一〇年）・『高尾山石老山記』（文政一〇年）・『多摩郡村々明細書』（年未詳）がある。立義は、文化一五年（二八一八）、五九才の時から、約一〇年の間に多摩地域を中心に各地を旅行し、次々と紀行文をまとめていった。日光への旅行は、彼にとつては唯一、遠方に出向いた旅であった。立義は頻繁に旅行できるほど裕福な暮らし⁽²¹⁾ぶりではなかったが、生来、肥満体質で、仕立屋が座り仕事だったこともあり、健康維持のために旅行をしていたようである。紀行文を見る限り、旅行は一人ではなく同行者がいたと見られる。日光の旅には狂歌仲間である新喬子・尚鯉子・万子が同行しているが、なかでも尚鯉子は病気がちだったため、平癒祈願のために立義が誘い出した。四人は、四月十七日の祭礼に合わせて江戸を出発し、東照宮を参拝したのち、中禅寺や華厳滝等を見物した。

立義の紀行文は、いずれも写本で伝来しており、出版された形跡はない。しかし、国立公文書館所蔵の『秩父巡拝図絵』には「編脩地誌備用典籍」の印があり、昌平坂学問所内の地誌調所に所蔵されていた。⁽²²⁾つまり、その内容は知識人の読書に耐えうると判断されていたと言えるよう。

また、『高尾山石老山記』には鹿津部真顔の序文がある。鹿津部真顔は通称北川嘉兵衛といい、江戸数寄屋橋河岸で汁粉屋を営んでいた。彼は、大田南畝の狂歌の弟子で、宿屋飯盛と並ぶ狂歌師であつたが戯作者としても知られる。おそらく、立義の周辺には狂歌師等からなる文化ネットワークがあり、そこに集う文化人が紀行文の読者だったのであろう。

紀行文には、沿道の景観、神社仏閣などの名所が細かく記されており、とくに名所については、関連文献の記述を併記していることから、その内容は紀行文というよりは地誌である。本人による挿絵も多く、冒頭には行程を示し、読者の便宜をはかっている。全体として記述スタイルはどの紀行文も同様でパターン化していた。

以下にその内容をみていこう。

(一) 内容構成と引用書目

『図誌』は四冊四巻からなる。巻一は江戸から日光に至る沿道の名所旧跡が中心で、日光山の入口である神橋で終わっている。立義は出発にあたり、『元禄巡見帳』をもとに沿道の村々の下調べをしていた。例えば、上鉢石町については「塗物椀折敷曲物漬物等あきなふ家あり、巡見帳に記したるより今ハ家数もはるかに増したるへし、さりながら御祭礼の節ハ旅人多く、何れの商人家にも旅客多きさまなり」とあり、『元禄巡見帳』の記述と比べながら、参詣者で賑わう町の様子を記している。⁽²³⁾

巻二は山内の堂社を紹介する内容になっており、二王門・陽明門・本社・奥院御廟・朝鮮国献上鐘・朝鮮国献上廻金燭台・琉球国献上燈台・阿蘭陀国献上釣金燭台・伊達政宗寄付南蛮鉄燈籠・相輪塔等を挿絵入りで紹介している。

とくに琉球・朝鮮・阿蘭陀の献上鐘・燭台等については、山内の案内人の話と自身が文献から得た知識を照合しながら記している。

卷三では四本竜寺・本宮権現・三仏堂・大猷院殿・稻荷川・霧降之滝・華厳瀧等を取り上げている。卷三は『図誌』の中心とも言える部分で、東遊・延年之舞・御神輿行列・日光せめといった儀式が絵入りで説明されている。立義は金一〇〇疋を納め、大猷院殿参拝の許可を得ているが、山内の案内人に、別途、拝見料を渡すと、特別に参拝が許可されることがあったようである。しかし、規制も厳しく、大猷院殿で偶然耳にした延年之舞の唱歌を書き留めようとする、「秘事」であるという理由で許されなかった。後述するように、「延年之舞」の記述を『山志』と比較すると、

表2 『日光巡拝図誌』の引用書目

国花万葉集・四神地名録・武蔵演路・百川朝宗・元禄武蔵絵図・廻国雜記・吾妻鏡・吾妻鑑要目集成・坂東観音霊場記・日光名勝記・庚午紀行・元禄巡見帳・日光名跡志・日光志・万葉集・木曾名所図会・日光山法華八講之記・和名類聚抄・下学集・日光地志・朝野雜記・日光御遷座之記・塩尻之記・谷響集・空華談叢・延喜式・左入公一代記・延年之舞図・東遊之図・温故隨筆・御神輿行列次第世諺問答・日光惣絵図・大和本草・日光せめの図・本朝俗諺志・閑田耕筆・笈埃隨筆・中禅寺私記・元亨釈書・本朝高僧伝・性靈集・堀川院百首・地藏靈驗記・日光年中行事・日本輿地図・雲林石譜・奥の細道・続古事談・鵝峰文集・土津遺筆・大清記事・昆陽漫録

（披見できなかった書目）

日光巡覽記・日光山記・日光山縁起・日光山紀行・日光山八景詩・日光山道しるへ・日光山道之記・日光雜話・日光山道中記・日光諸碑銘・日光紀行・日光山御祭礼行列略図・日光山御記・日光記・日光山供奉私記・日光堂舎建立旧記・二荒山千部会記・日光山三月会記・東照宮三十三回記・下野絵図・東照新廟記

典拠：『日光巡拝図誌』（国文学研究資料館蔵）

かなり異なっていることに気づく。記憶をもとに儀式の詳細の再現を試みた点に『図誌』の特徴がある。

巻四は中禅寺・男体山といった奥日光の名所を中心に帰路の様子が記されている。

引用文献は五二点で、表2に示した通りである。『四神地名録』・『武蔵演路』・『国家万葉集』・『吾妻鏡』・『万葉集』・『和名類聚抄』といった関東地域の地誌編纂の基本史料となる、地誌・歴史書・和歌集のほかに、日光の儀式の記録である冷泉為景の『日光山法華八講之記』等日光関係の文献収集を試みている点が興味深い。『日光山法華八講之記』は、『日光山志』にも全文が引用されており、知識人の間では基本文献として認識されていたのであろう。このほか、立義が入手できた日光関係書物には貝原益軒『日光名勝記』・鷹橋義武『日光名跡志』・烏丸光廣『日光御遷座之記』がある。また、編者不明ではあるが『日光志』・『日光地志』といった地誌も含まれている。また、文献史料が入手しにくい秘儀については、「延年之舞図」・「東遊之図」・「日光せめ之図」といった図の収集に努めている。

立義は、実際に見ることができなかった日光関係書物二一点の書名も書き上げている。これらには林道春の『東照宮三十三回忌』・『東照新廟記』といった年忌法要や造宮記録をはじめ、社参の供奉記録や紀行文等が含まれる。そもそも日光の儀礼は秘事であり、それに纏わる記録類も特定の家が管理しているため、見ることは非常に難しかった。武家が所蔵する記録類についても、その存在を知り得ても披見には至らなかったことがわかる。しかし、これらの書目について、立義は「地誌目録」で確認したと記しており、武家や社家が独占していた記録に関する情報を入手したことは注目される。

（二）立義の歴史意識

a 文献と実地調査による考証

『図誌』の記述の特色は、多様な文献と立義自身が見聞した経験による考証にある。その手法は二つあり、一つは地誌・歴史書等から関連記述を抽出し、それらを併記することで、史蹟や名所の説明をするものである。近世地誌では一般的な手法である。もう一つは、予め文献から得ていた情報と現地での見聞を比較して、史蹟や名所の実態を詳細に記すものである。近年の研究では後者の手法は、書物の受容によつて参詣者の旅程が規制され、プロトタイプ化した影響によるとされている。⁽²⁴⁾ 先述のように立義が、『元禄巡見帳』の記述と比較して日光周辺の町場の賑わい記しているのがその一例である。このほか、朝鮮・琉球・阿蘭陀からの献上品についても、『日光志』の記述とそれとを比較した内容になっている。『日光志』は三巻からなる漢文の地誌で作者は不明である。

立義は『日光志』において、朝鮮国からの献上品とする「三十六缸燭台」について、案内人の説明をもとに、琉球からの献上品であると訂正した上で、さらに『日光山法華八講之記』中の「朝鮮鐘の前にすえたる灯籠は琉球より奉れしとんと見へたり」という記述を引用し、案内人の話を文献で実証している。⁽²⁵⁾

つまり、立義は参詣という体験を通して既存の知識を検証し、見物によつて得た新たな情報を文献で考証することで、知識をより確かで豊かなものにしていったのである。地誌や文学作品等に記された名所を訪れ、身体を通して体得することも実証だったのである。

また、立義は旅行中に聞いた案内人の話を、江戸に戻った後、文献で調べ真偽の確認をしている。『図誌』の中に、案内人に聞いた話として朝鮮鐘の前の獅子に纏わる逸話が記されている。これは、徳川家光が日光社参の際、造営の出来映えに「御称美の御意」を示さなかったことから、奉行が落胆しきつていたところ、朝鮮鐘の前の獅子の彫り物の前にやって来て、ようやく建物の見事さを賞賛したため、奉行が面目を取り戻したという話である。立義は、案内人の話を『日光志』の記述と比較して概ね正しいとした上で、獅子のある場所は全体の入口に過ぎないのであるから、家光が山内全てを上覧した上で発した言葉ではないと述べている。⁽²⁶⁾

このほか、立義は烏丸光廣『日光御遷座之記』に東照宮の改葬が「元和一三年」と誤って記されている点を指摘しており、文献史料の内容を精査していた様子が看取できる。⁽²⁷⁾

その一方で、久能山では、徳川家康の遺骸を日光へ改葬した天海を「盗人坊主」と呼んでいるという噂を「笑い話」として紹介している。⁽²⁸⁾ 文献や実地調査をもとに緻密な考証を試みながら、他方で他愛ない「笑い話」を取り上げているのは、読者を知識人だけに限定していない証左であろう。

b 奥院御廟・秘儀の再現

日光における神事や儀式は秘儀であり、そもそも細かく記録に残されるものではなかったが、立義はこの秘儀と言われる儀礼や、武家であっても容易に立ち入れない場所をあえて取り上げて記述している。その一例として徳川家康が祀られている「奥院御廟」の記述を見てみよう。

江戸時代における庶民の参詣は、陽明門を通り、拝殿向拝下（鰐口下）での拝礼が一般的であった。しかし、『図誌』

いようになつていたという。廟の前には、十六・七人程の力を必要とする大きな香炉が置かれていたとある。『図誌』の挿絵（図3）は、実際に目にしたかのように描かれており、宝塔にいたる三つの門および宝塔・香炉の描写は詳細である。

なお、『山志』には奥院御廟の記述はない。それは、東照宮に対する崇敬および幕府による規制があったためと考えら

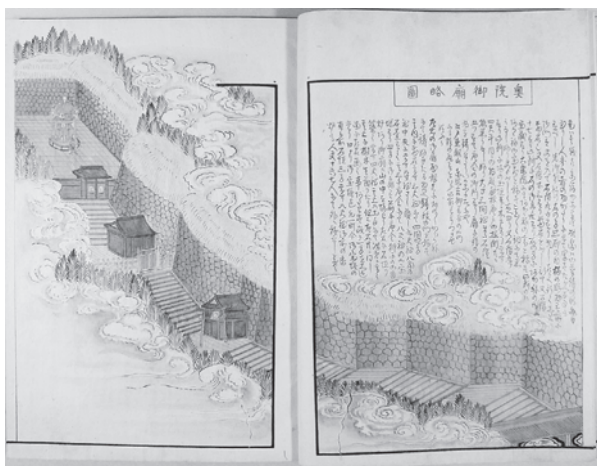


図3 奥院御廟
（『日光巡拝図誌』国文学研究資料館所蔵）

では庶民が立ち入れない奥院御廟の様子について略図を添えて説明している。⁽²⁹⁾

是ハ貴賤共に参詣かなハす、此図ハ御普請の時毎日至りし人歩^(志)の者の物語りニつきて写す、たかへる事も有るへし、（中略）御廟ハ山の中を堀わり左右に石垣を築く、高さ四尺程其上ハ土手にて次第に高く、其上に樹木生茂りたり、但、左右共に同じ図に左右画く事あたハす、故ニ一方をしるしたり、入口より御宝塔迄凡一町余、御宝塔有所石垣三方高さ八尺程御前の香炉人夫十六七人にて外へ移せしとぞ

右の記述と図3は、奥院御廟のおおよその概観を示したものである。立義は、この情報を奥院御廟の普請の携わった人夫から聞き出したと述べている。これによれば、御廟は山中にあり、入口から宝塔までは凡そ一町程の石段が続いていた。左右は石垣で囲まれ、その外側に樹木が植えられており外部から見えな

れる。これに対し、『図誌』は出版を意図していなかったこともあり、秘匿されたものへの江戸庶民の興味を反映した内容になっている。

『図誌』には秘儀とされる東遊・延年之舞も挿絵入りで紹介されている。東遊は、祭礼時に御旅所で行われる神事の一つである。もともとは久能山の麓に伝わる民間舞踊で平安時代に宮中に伝えられたという。この舞は宮中以外では、賀茂・春日・石清水などの勅祭社でのみ行われており、服属儀礼の意味も持っていた。『山志』では以下のように記されている。³⁰

御祭儀の節、御旅所にて奏する舞曲なり、伶人の内七人にて修せり、その内舞人四人は、紅沙の袍に下襲藤色、表袴は白精好に青摺の模様、下袴は緋精好の大口、陪従の三人は紫の沙袍に蠟虎を縫ひたる蛮衣、下襲は玉虫色紫の指貫、右の七人ともに騎馬にて神輿に供奉し、御旅所に至る、入御の節、伶人、御安座樂とて拔頭を奏す、御三品立の御膳を奉る、これを上り御膳と唱へ、この時十天樂を奏し奉る、それより東遊を歌舞する、陪従の一人は神樂歌を唱へ、ほか二人は箏篳と高麗笛を役す、舞曲終りて御膳をすべすを、下御膳と称して、またこの時伶人、羅陵王を奏する事とかや

孟縉は、右のように、東遊の伶人・舞人の装束と儀式の次第を簡略にまとめ、これに挿絵を二点添えている。一点は間宮土信によるもので拝殿の方から儀式全体を描いた図で、もう一点は渡辺崋山が描いた舞人と伶人の挿絵である。これに続いて、『続拾遺和歌集』から東遊を詠んだ和歌を引用し、宝永五年（一七〇八）に建立された東遊碑の銘文が記されているのみである。つまり、客観的記述につとめ、儀式に関する考証や、孟縉自身の見解を排した構成になっている。これは東遊が東照宮を象徴する儀礼であり、秘儀であることを考慮したためである。

これに対し『図誌』では、西丸書院番で考証家としても知られる大久保忠寄所蔵の「東遊之図」を縮写して説明に

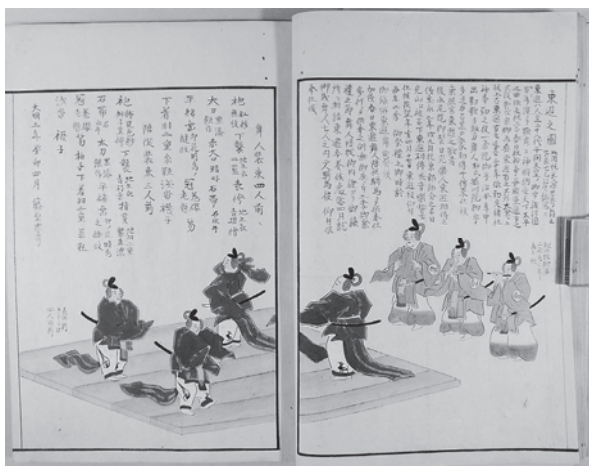


図4 東遊
 (『日光巡拝図誌』巻三、国文学研究資料館所蔵)

草の直垂・白の大口袴を着して舞うものである。天下泰平・国土豊穰を祈願する秘儀で、慈覚大師が入唐の際に伝え
 たと言われる。『山志』では、東遊と同様に、僧衆の装束や両僧の舞の様子を順序通りに記すことに終始している。こ
 れに対して『図誌』では、延年之舞を描いた挿絵を配し、それに続けて自身の考証を記している。⁽³²⁾

抑延年之舞と申ハ僧徒天下安全の為に行ふ舞なり、ひえい山南都の僧伝来なり、或説然るに今ハ諸方皆たへて只
 日光のミ伝ると云、また此うたう詞ハ伝教大師の作にて入唐の時いとま乞に舞給ひし遺風也と、昔は饗宴の節ハ

替えている。⁽³¹⁾これによれば、東遊は秘曲で古くから京都樂人が
 下向して奉奏していたため、毎年の奉奏は難しかったが、宝永
 三年（一七〇六）に日光樂人が伝授をうけたことから毎年、奏
 することが可能になったという。大久保忠寄の考証の引用では
 あるが、東遊が日光で奉奏されるようになった経緯が説明され
 ている。挿絵を比較すると、舞人等の装束は『山志』より詳細
 で、袴の様子が緻密に描かれている。舞人が履物を履いていな
 い点が『山志』と異なっている。さらに、立義は、舞人が騎馬
 で神輿に供奉している様子を見たことを書きとめている。

延年之舞は、毎年四月一七日の東照宮祭礼・三月二日の新宮
 祭礼に行われた儀式である。『山志』によれば祭礼当日の朝五つ
 頃、神輿が新宮を出発する前に三仏堂前で行われたとある。一

山の衆徒二人が頭を白の五条の袈裟でつつみ、緋緞子に牡丹唐



図5 延年之舞

(『日光巡拝図誌』巻三、国文学研究資料館所蔵)

舞し事東鑑所々二見へたり、但舞形一樣ならず、温故随筆
 二曰太平記二猿楽ハ佳令延年の法なりと、或ハ延年の舞と
 て舞楽の時最初に有義なりと云、此悪鬼魔障を払ふ一術と
 かや、(中略)右にて考れハ往古ハ今の能の如く舞たるを次
 第にわざ多く成て、はてハ能の間の狂言の如き事になりし
 と見ゆされハ今日光にて舞ふ所かへつて往古のさまなるへ
 し、但し日光に伝ふる所は只一通りなりやしらす、延年の
 舞の図一帖世間につたわる其詞書に鷹帽子ハかぶり不申候
 と有、この度見たるにはかぶりたり、さらハ右の図あらわ
 したる人の見たる時ハかぶらざりしと見ゆ、されバ舞形一
 通りなるべからず

立義は延年之舞の伝来について考察を試みている。ここでは、
 まず、『吾妻鏡』を用いて中世以来饗宴の席で舞われ、その形式
 は一定ではないとしている。さらに『温故随筆』や『太平記』などを
 の記述を分析しながら、往古は能のように舞わ
 れていたものが、狂言に近い形へと変化したのではないかと述べて、
 日光の延年之舞が古い形式を伝える舞であると
 結論づけた。ここで興味深いのは、立義が延年之舞を描いた図をす
 でに見ていたことである。図と彼が実際に見た舞
 を比較して鷹帽子着用の有無といった細部にまで考証を広げている。
 一九世紀に入ると、東遊や延年之舞はその音唱
 が研究対象になっており、本居宣長の『東遊考』等がその一例である。
 つまり、日光の秘儀である東遊や延年之舞は、

学問の対象でもあり、知識人層においては、それを知ることができると考えられる。そして、その知識は、立義に代表される江戸の文人の間にも共有化されていったのである。そこには、儀礼によって体现される日光の象徴が、書物というメディアを通じて情報化されていく状況が看取できるのである。

（三）江戸町人の東照宮信仰の広がり

『図誌』の冒頭において、立義は日光参詣の理由を以下のように述べている。⁽³³⁾

凡人の世にある程尤思ふへき事、第一父母の恩、第二国王の恩、第三天地の恩、第四に衆生の恩なり、是を四恩といふ、父母のめくみハおのつからしりぬ、国王のめくミのふかきいふもまゝなり、天下みたれたらんハ父母を置に所なし、国しつかならしんハ妻子を養ふによしなく、今や四つの海浪静にして安く、父母妻子を養う事あふけなくもかしこくも東照大権現の御たまものなり、されはいつれの神仏をおきても詣て物し奉るへきをおのかしゝ私によりて他所へハ詣れと二荒の御山へハ登らざる事いかにそや、そはいへわれも五十過る迄心ハおもひながら過したるを今年文化十五五月文政
ト改元 四月新喬子・尚鯉子・萬子の三人思ひたちて詣んとす、おのれにも同道せん事をすゝむ

立義は四恩の思想から現世の平穩を説き、それはすべて「東照宮の御たまもの」としている。さらに、他の神社仏閣の参詣よりも日光優先すべきところ、これまで参詣できず、文化一五年に至り、ようやく実現したと述べている。立義は多少、誇張して述べているものの、家の繁栄や地域社会の安定を東照宮の恩恵と考え、東照宮を信仰する傾向は一八世紀半ば以降、少なからず各地で見られた。民衆世界において東照宮は民俗神として信仰されることもあったの

である。⁽³⁴⁾ その一例として深川材木町の地主鈴木家をあげておきたい。⁽³⁵⁾ 鈴木家は近世初頭に武蔵国比企郡三保谷から江戸に出て伊勢町に居を構えた。その後、居住地を変え、幕末期には深川材木町に住んでいたが、初代が入手した伊勢町の土地は代々、所持し続けていた。鈴木家は、毎年、家康が他界した四月一七日に「日光様御祭礼」と称し、東照宮の遺訓を記した掛け軸を飾って、親戚や縁者に食事を振る舞っていた。

また、『江戸名所図会』を見ると、江戸およびその周辺地域で、東照宮を祀り庶民の信仰を集めていた寺社があったことが確認できる。例えば浅草寺では毎月一七日に、終夜、誦経が行なわれていた。鳥越の西福寺・妻恋大明神では、東照宮の神影や像を安置し、四月一七日には特別に民衆の参拝を許していたという。徳川家の菩提寺である増上寺では、毎年四月一七日に祭礼を行っており、家康を祀る安国殿は多くの人々で賑わった。

一九世紀初頭、東照宮は家や地域に繁栄をもたらすものとして信仰の対象となり、家や町・村の由緒と結びついていった。とくに江戸やその周辺地域は將軍の膝下であることから、とくにその傾向が強かったと言える。それゆえに、本来、崇敬の対象であり秘匿すべきである日光東照宮の奥院御廟や東遊・延年之舞といった神事は、読者の関心が高く、『図誌』の中心に成り得たのである。

おわりに

以上、雑駁ではあるが、『山志』・『図誌』をもとに、一九世紀初頭の日光をめぐる歴史意識について述べてきた。

『山志』は江戸時代において、最もまとまった内容をもつ日光の地誌である。その内容の特色は三点にまとめられる。一つめには山内の堂社について詳細な記述がなされている点である。この背景には、幕府の指示により孟縉自身

の考証が削除されたことによる。二つめは中世以来の歴史を重視していることである。これは、江戸時代においても日光が山岳信仰の霊場として人々の信仰を集めていたことによる。三つめは日光周辺の名所・地域の人々の暮らし・動植物等を通じて日光を包括的に捉え、それを「徳川の平和」の象徴としてまとめている点である。こうした内容構成は、孟縉が八王子千人同心という特異な存在であったことと無関係ではない。八王子千人同心は集団全体としては、徳川氏忠臣という意識を持ち身分上昇を志向しつつも、内部にあつては旧家層と新興層の対立があつた。こうした状況が孟縉に『山志』を編纂させるにいたらせたと考えられる。

『図誌』は、『山志』とは異なり、日光全体について記すというよりは、東照宮をはじめ中心的な建造物と東照宮祭礼・東遊・延年之舞・日光せめといった日光の儀礼に重点をおいた構成になっている。さらに、それを文章だけではなく、豊富な挿絵によつて視覚的に表現している。東照宮の奥院御廟の挿絵はその一例である。『図誌』は、狂歌師を中心とした文人サークルが読者であり、出版には至っていない。しかし、『図誌』の内容は、江戸庶民が日光の何に興味をもっていたかを端的に示している。秘儀といわれた儀礼や庶民が立ち入れない空間こそが関心事であり、これらの情報は『図誌』が出版されなかったからこそ記しえたと言える。

日光山は勝道上人によつて開山された山岳信仰の霊場であつたが、元和三年（一六一七）の東照宮の創建を契機に徳川権威の象徴となった。山内で執行される法会や東遊・延年之舞等の儀礼は秘儀であり、堂社も民衆が自由にすることは許されていなかった。まさに、秘匿されることでその権威を維持してきたと言える。しかし、幕府は一方で、東照宮の神威を高めるために、一定の規制のもとに庶民の鰐口下までの参詣・初穂料や賽銭の奉納・堂社の拝見を許可していた。また、万石以下御目見以上の旗本に対しても、寛政三年（一七九一）に手続きを経れば東照宮・大猷院殿を拝礼できるとし、日光参詣を奨励した。⁽³⁶⁾ こうした状況が中世以来の修験の霊場としての伝統と相俟つて東照宮信

仰を拡大させていったのである。

一八世紀半ば以降、東照宮が家や地域の由緒と結びつき、広く信仰されるようになると、東照宮はもはや秘匿されるものではなく、民衆に開かれた存在へと変化を遂げざるをえなかった。日光地誌の編纂・刊行は、こうした社会の変容を反映したものであり、秘儀とされてきた儀式の情報化を促した。この象徴から情報化へという儀礼の変質こそが日光をめぐる歴史意識を成立させたのである。孟縉と立義の日光へのアプローチはかなり異なるが、これは情報によって対象化された日光がさらに分節していく過程であり、多様な読者を想定した情報空間が成立していたことが看取できるのである。

〔註〕

- (1) 中野光浩『諸国東照宮の史的研究』（名著刊行会、二〇〇九年）。
- (2) 『日光市史』中巻（日光市、一九七四年）。
- (3) 白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣出版、二〇〇四年）。
- (4) 若尾政希『太平記読みの時代―近世政治思想史の構想』（平凡社、一九九年）、佐藤宏之「実録のながれ―『越後騒動』と歴史・記憶・メディア―」（若尾政希編『書物文化とその基底』平凡社、二〇一五年）など。
- (5) 拙稿『日本近世の歴史意識と情報空間』（名著出版、二〇一〇年）、拙稿『歴史』の発見―日光東照宮の歴史化―（岩淵令治編『史跡で読む日本の歴史9 江戸の都市と文化』（吉川弘文館、二〇一〇年）。
- (6) 横田冬彦『日本の歴史 成熟する江戸』（講談社、二〇〇一年）。
- (7) 小関悠一郎「名君の近世」（吉川弘文館、二〇一二年）。

- (8) 東照宮の彫刻の意味づけについては、高藤晴俊『日光東照宮の謎』（講談社現代新書、一九九六年）を参照。
- (9) 曾根原原理『徳川家康神格化への道』（吉川弘文館、一九九六年）。
- (10) 『日本名門風俗図会』2 関東の巻 解説（角川書店、一九八〇年）、『日光叢書 社家御番所日記』十七（日光東照宮社務所、一九七七年）三三頁。
- (11) 植田孟縉の経歴については馬場喜一『植田孟縉』（かたくら書店新書、二〇一一年）。
- (12) 『日本名所風俗図会』2 関東の巻 解説（角川書店、一九八〇年）。
- (13) 『日光山志』序文（国文学研究資料館所蔵 以下『日光山志』は同館所蔵）。
- (14) ・(15) 『日光山志』巻五。
- (16) 『日光山志』巻四。
- (17) ・(19) 註12に同じ。
- (20) 吉岡孝『八王子千人同心』（同成社、二〇〇二年）。
- (21) 氏家幹人『江戸人の老い』（PHP新書、二〇〇一年）。
- (22) 『秩父巡拝図絵』は「編脩地誌備用典籍」の印はあるものの、『編脩地誌備用典籍解題』には収録されていない。
- (23) 『日光巡拝図誌』巻一（国文学研究資料館所蔵、以下『日光巡拝図誌』は同館所蔵）。
- (24) 原淳一郎『江戸の旅と出版文化』（三弥井書店、二〇一三年）。
- (25) ・(29) 『日光巡拝図誌』巻二。
- (30) 『日光山志』巻五。
- (31) ・(32) 『日光巡拝図誌』巻三。

(33) 『日光巡拝図誌』卷一。

(34) 高野信治『民俗神や民族神との関係分析を通じた近世武家権力の基礎的研究』(文部科学省科学研究助成費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、二〇〇五年)。

(35) 『鈴木三右衛門日記』(東京都公文書館、二〇〇八年)。

(36) 石井良助他編『御触書天保集成』下(岩波書店、一九七七年)一七一―一七四頁。